

**立教大学学術推進特別重点資金(立教SFR)**  
**個人研究費**  
**2007年度研究成果報告書**

研究代表者	所属・職名	氏名
	社会学部・助教	水原俊博 印
研究課題	グローバル化する消費社会についての経済社会学的、記号論的研究	
研究期間	2007年度	
研究経費	500,000円	

**研究の概要**(200~300字で記入、図・グラフは使用しないこと)

本研究の当初の目的は第一に、近年、世界的に普及、発展している消費社会がアメリカ型の消費社会に同質化するのか、それとも多様化するのかを理論的、実証的に研究、調査することである。第二に、これまで消費社会論における有力な理論的枠組みであった記号論を理論的に発展させることである。こうした記号論の発展は消費社会についての理解を深めると考えられ、したがって、それはグローバル化する消費社会についての研究調査に貢献すると考えてよかろう。なお、こうした本研究の過程では、国際化する消費生活をテーマとした調査データ、外部の研究機関の調査データ、そして、マクロデータの分析も行う予定である。

**キーワード**(研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 消費社会 ] [ 消費文化 ] [ グローバル化 ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

前頁で述べたように本研究は以下の3つからなる。

- (1) グローバル化する消費社会についての理論研究
- (2) グローバル化する消費社会についての調査研究
- (3) 記号論的消費社会論の理論研究

以下では上記した各研究の成果の概要について説明する。

(1) グローバル化する消費社会について理論研究

本研究は 2006 年度と同様に以下のようなものである。消費社会のグローバリゼーションについては数多くの先行研究が内外で、また、多様な分野で蓄積されている。そうした先行研究を精査、整理し、理論、諸概念を批判的に検討するのが本研究の概要である。2007 年度は具体的にいえば、Ritzer のマクドナルド化論、Ritzer の議論を批判する Robertson らのグローカリゼーション論や Watson らの人類学的研究、また、これらを批判的に検討する Beck らによる反グローバリズム論、世界の各地域の流通についてのマーケティング研究 (グローバル・マーケティング研究) などについて精査、検討した。本研究は、当初、予定したサーベイ論文としてまとめることができなかつたものの、2007 年度、執筆した複数の論文において、部分的にその成果を認めることができる。また、所属する「グローバル消費文化研究会」(研究代表: 間々田孝夫) では、2007 年度、産地ナショナリズムや外国消費と社会意識との関連を含む広範な調査課題を設定し、中心的役割を担って大規模量的調査を実施したのであるが、その調査設計、調査票作成段階において、本研究の成果は少なくない貢献を果したように思われる。

(2) グローバル化する消費社会についての調査研究

本研究は 2005、2006 年度と同様に「世界中の消費社会がグローバル化によってアメリカ型の消費社会に同質化する」というグローバル化としての「マクドナルド化仮説」を設定し、非参与観察などによって実証的に調査研究し、また、調査対象となる地域の資料収集することを目的とした。2006 年度のバンコクに続き、2007 年度も、著しい経済発展をつづける東南アジアのマレーシアの首都であるクアラ・ Lumpur を調査対象とし、調査研究、資料収集を行った。

【調査概要】

- 調査期間 2008 年 1 月 24 日～28 日までの 5 日間
- 調査地 クアラ・ Lumpur の中心街、郊外  
高級ショッピング・センター／モール (以下、SC/M)、デパートなどが軒を列ねる Bukit Bintang 地域や、JUSCO 的な郊外型 SC/M、レジャー施

**研究成果の概要** (つづき)

設に併設された郊外複合型 SC/M、マレー系、華人などエスニック・グループがそれぞれ多く居住する地域の土着的な SC/M、さらに市中のコンビニ、ドラッグ・ストア、ファースト・フード店など。

本研究をまとめた論文では、クアラ・ Lumpur の消費社会についての調査記録を詳述し、マクドナルド化仮説の妥当性、クアラ・ Lumpur の消費社会のポストモダン状況について検討した。前者について端的に結論をいえば、2005、2006 年度にそれぞれ同様の調査を実施したシンガポール、バンコクの場合と同様に、同仮説が妥当する面もあれば、妥当しない面もあり、言い換えると、クアラ・ Lumpur の消費社会は必ずしもアメリカ型に同質化せず、多様化の様相を示していた。具体的には商品、店舗、サービス、消費者の行動の現地化が著しく進んでいた。なお、こうしたクアラ・ Lumpur の現地化の程度はシンガポールやバンコクに比して著しく思われたが、それはクアラ・ Lumpur、ひいてはマレーシアが多民族からなり、イスラム、ヒンズー文化の強い影響下にあるためだと思われる。そうであれば、今後の課題であるアメリカ型消費文化の現地化の分析では、現地地域の宗教、文化、社会規範、伝統的な商慣行、社会構造を現地化の影響要因として重視する必要があるだろう。

**(3) 記号論的消費社会論の理論研究**

本研究は博士論文を提出した 2005 年度以降、継続的に行ってきたものである。既存の記号論的消費社会論では言語記号をモデルに消費対象、消費行動を分析するのであるが、情報、時間、空間を含めた消費対象は非言語記号として捉えることが妥当である以上、既存の議論は誤りを多く含むように思われた。こうしたことから、本研究では記号論の先行研究を検討し、消費対象、消費行動を捉えるのに適切な記号論の理論モデルの構築に取り組んできた。2007 年度も、これまでと同様に記号論、およびその関連分野（言語哲学、ポストモダン思想）の文献を吟味したが、当初、予定していた先行研究のサーベイ論文は著すことはできなかった。しかしながら、2006 年度に執筆、学会誌に投稿し、年度をまたいで査読に入り、2007 年度にどうにか最終稿に仕上げ、学会誌に掲載された複数の論文では差異化、消費主義、消費文化を扱ったのであるが、それらの論文の理論部分に 2007 年度の本研究の成果を認めることができる。

さて、当初、予定していたとおり、上述した理論的、実証的研究に関連して、社会調査データ（2004、2005 年度に実施した社会調査データや外部研究機関の消費生活についてのパネルデータなど）の分析を、2007 年度をとおして行った。その成果は 2007 年度に最終稿に仕上げ、学会誌に掲載された複数の論文に認めることができる。なお、付言すると、こうしたデータ分析を地道に行ない、データ分析法の研究に励んだことが幸いして、推測統計の理論的解説と SPSS による具体的なデータ分析法を扱う解説書の一部を執筆し、出版できた。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

(1) 雑誌論文

- 水原俊博, 「差異化消費と消費主義的価値意識——『2005年度国際化する消費生活調査』をとおして」『社会経済システム』28号, 2007年, pp.91-99 (単著, 査読付).
- 寺島拓幸・水原俊博, 「消費文化の断層——男性の消費価値観にみられる世代差」『経済社会学会年報』第29号, 2007年, pp.283-294 (共著, 査読付).
- 水原俊博, 「クアラ・ルンプールの消費社会の現在——SC/Mの非参与観察調査報告」『応用社会学研究』第50号, 2008年, pp.177-186.

(2) 図書

- 水原俊博, 2007, 「クロス集計, 独立性の検定」高田洋一・廣瀬毅士他編『SPSSによる多変量解析』オーム社, pp.71-94.

(3) シンポジウム・公開講演会の開催

なし。

(4) その他

学会発表などなし。